

第 56 回 宮崎整形外科懇話会 プログラム

日 時：平成 20 年 7 月 19 日（土） 14：30 開会

会 場：宮崎県医師会館 研修室（2 階）

☎880-0023 宮崎市和知川原 1 丁目 101 ☎0985(22)5118

会 長：帖 佐 悦 男（宮崎大学医学部整形外科学教室）

事務局：☎889-1692 宮崎郡清武町大字木原 5200
宮崎大学医学部整形外科学教室内 担当 関本朝久
☎ 0985(85)0986（直通） FAX 0985(84)2931

共 催 宮崎整形外科懇話会
大日本住友製薬株式会社

参加者へのお知らせ

14:00～受付

1. 参加費 ; 1,000 円
2. 年会費 ; 3,000 円 ※未納の方は受付で納入をお願いします。

演者へのお知らせ

1. 口演時間 ; 一般演題・1題5分、討論3分
主 題・1題5分とします。
2. 発表方法 ;

口演発表はPC (パソコン) のみ使用可能ですのであらかじめ御了承ください。

- (1) コンピュータは事務局で用意いたします。持ち込みはできません。
- (2) 事前に動作確認を致しますので、データはCD-R (RW) またはUSBフラッシュメモリに作成していただき、平成20年7月14日(月)必着で事務局までお送りください。

CD-R(RW)、USBフラッシュメモリ作成要領

- (1) 発表データの形式はMicrosoft Power Point Windows版に限ります。
アプリケーション : Power Point 2000、XP(2002)、2003、2007
- (2) 発表データのフォントについては、標準で装備されているもの (MS明朝、MSゴシック、MSP明朝、MSPゴシック等) を使用してください。
- (3) CD-R(RW)、USBフラッシュメモリの表面に次の内容を明記してください。
①演題番号 ②筆頭演者名 ③所属

世話人会のお知らせ

14:00～14:30 会議室 (5階)

特別講演のお知らせ

17:30～18:30

『橈骨遠位端骨折の治療』

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院整形外科
教授 笹 益雄 先生

注 上記講演は、次の単位として認定されています。 ※受講料 : 各1,000円
日本整形外科学会教育研修会専門医資格継続単位1単位
認定番号 : 08-0694-00 [2 外傷性疾患・10 手関節・手疾患]
日本手の外科学会教育研修講演単位1単位
[4 骨折・脱臼・靭帯損傷]

14:30 開 会
総 会

14:35～15:25 一般演題Ⅰ 座長 県立延岡病院整形外科 栗原 典近

1. 当院における腰椎後方椎体間固定術 (PLIF) 後骨癒合不良因子の検討
野崎東病院 整形外科 福島 克彦、ほか
2. 外側型腰椎椎間板ヘルニアの2例
県立宮崎病院 整形外科 井上三四郎、ほか
3. 両側大腿骨頸部に insufficiency fracture を生じた1例
宮崎市郡医師会病院 整形外科 増田 寛、ほか
4. 人工膝関節置換術後に生じた大腿骨頸部骨折の2例
串間市民病院 整形外科 川添 浩史、ほか
5. 転子部骨折術後にラグスクリューの骨内移動を生じた2例
高千穂町国民健康保険病院 整形外科 塩月 康弘、ほか
6. 大腿骨近位部骨折術後歩行能の獲得時期と転帰先の検討
球磨郡公立多良木病院 整形外科 浪平 辰州、ほか

15:25～16:05 一般演題Ⅱ 座長 串間市民病院整形外科 川添 浩史

7. 当院における関節リウマチに対する生物学的製剤の使用状況とその成績について
潤和会記念病院 整形外科リウマチ科 甲斐 睦章、ほか
8. 悪性腫瘍切除後の皮膚軟部組織欠損に対する広背筋皮弁再建の有用性
宮崎社会保険病院 形成外科 檜山 和也、ほか
9. 考案した緩衝体を土踏まずに試用した経験
平部整形外科医院 平部 久彬、ほか
10. 当院における術後深部静脈血栓症の予防
橘病院 整形外科 吉川 教恵、ほか
11. 舟状骨骨折に対する治療経験
宮崎社会保険病院 整形外科 小牧 亘、ほか

☆☆☆ 休憩 (10分) ☆☆☆

16 : 15 ~ 17 : 20 主題 : 橈骨遠位部骨折

座長 宮崎大学医学部整形外科 矢野 浩明

12. 橈骨遠位端骨折に対する Modified Kapandji pinning 法の経験
整形外科前原病院 下野 哲朗、ほか
13. 粉碎関節内型の橈骨遠位部骨折に対する創外固定法の治療成績
県立日南病院 整形外科 川野 彰裕、ほか
14. 橈骨遠位端骨折に対する ACU-LOC Distal Radius Plate System の使用経験
宮崎市郡医師会病院 整形外科 森 治樹、ほか
15. 橈骨遠位端骨折に施行した掌側ロッキングプレートが折損した 1 症例
県立宮崎病院 整形外科 森 達哉、ほか
16. 当院における橈骨遠位端骨折に対する、掌側ロッキングプレートによる治療経験
県立延岡病院 整形外科 河野 立、ほか
17. 術後再転位により治療に難渋した小児の橈尺骨骨幹部遠位 1/3 骨折の治療経験
県立宮崎病院 整形外科 高橋 祐介
18. 橈骨遠位端骨折後に遠位橈尺関節障害を来した症例
宮崎大学医学部 整形外科 崎濱 智美、ほか

☆☆☆ 休憩 (10分) ☆☆☆

17 : 30 ~ 18 : 30 特別講演

座長 宮崎大学医学部整形外科 帖佐 悦男

『橈骨遠位端骨折の治療』

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院整形外科
教授 笹 益雄 先生

18 : 30 閉 会

開 会 (1 4 : 3 0)

総 会

一般演題 I (1 4 : 3 5 ~ 1 5 : 2 5)

座長 県立延岡病院整形外科 栗原 典近

1. 当院における腰椎後方椎体間固定術 (PLIF) 後骨癒合不良因子の検討

野崎東病院 整形外科

○福島 克彦 後藤 啓輔 田島 直也

弓削 孝雄 井上 篤

宮崎大学 整形外科

久保紳一郎

【目的】PLIFは不安定性を伴う腰椎疾患に対して除圧と椎体間固定が行えるすぐれた術式である。今回当院におけるPLIF後骨癒合不良因子を検討したので報告する。

【対象と方法】2005年2月～2007年4月に当院でPLIFを施行し術後1年を経過した症例58例を対象とした。これらの症例に対し、検討項目として年齢・性別・固定高位・手術時間・出血量・椎間板摘出量・術前後ヘモグロビン変化・身長・体重・BMIとし、目的変数を骨癒合の有無とした統計学的骨癒合不良因子につき検討した。解析方法は、個々の説明変数に対し単変量解析を施行した。次に、説明変数に対し目的変数を骨癒合の有無としたロジスティック多変量解析も施行した。

【結果】当院における術後1年の骨癒合は52例の89%であった。各群間の単解析・ロジスティック多変量解析の結果、固定高位のL5/Sは、L2/3・3/4・4/5骨癒合不良因子において統計学的有意差をみとめ骨癒合が不良だった。他の検討項目では有意差認めなかった。

2. 外側型腰椎椎間板ヘルニアの2例

県立宮崎病院 整形外科

○井上三四郎

阿久根広宣

高妻 雅和

菊池 直士

末永 賢也

齊田 義和

伴 光正

矢野 英寿

高橋 祐介

森 達哉

外側ヘルニアに対して手術を行った2例を報告する。症例は2例、それぞれ65歳と67歳の男性である。ともに激しい下肢症状を主訴に来院、初診時に即日入院となった。診察・X線検査の後に、MRIを撮影し外側ヘルニアと診断した。その後椎間板造影およびCT-Discography (CTD)を行い、手術を行った。術式は骨形成的椎弓切除術1例、PLIF1例であった。

外側ヘルニアの診断において、CTDが有用であるのは間違いない。CTDが躊躇される理由は、侵襲的なうえ化膿性椎間板炎という致命的な合併症が生じる点に尽きる。私は、病歴・身体所見・MRIより診断が確定できるならば、必ずしも行う必要はないと考えている。しかしながら、今回提示したような保存治療無効例では当然手術を考慮することになり、その時点で少しでも診断に自信がないならば躊躇せずにCTDを行うべきである。

3. 両側大腿骨頸部にinsufficiency fractureを生じた1例

宮崎市郡医師会病院 整形外科

○増田 寛 福元 洋一 森 治樹
小島 岳史

今回われわれは、両側大腿骨頸部に脆弱性骨折 (insufficiency fracture) を生じた症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】77歳、女性。

【主訴】両股関節痛、歩行障害。

【現病歴】2006年春より両側股関節痛が出現。明らかな外傷等の誘因はなかった。複数の整形外科・心療内科への通院歴があった。2007年10月疼痛が増悪し歩行困難となったため前医受診。当科紹介入院となった。

【経過】単純X線・MRIで両側大腿骨頸部骨折を認め、両側の人工骨頭挿入術を施行した。歩行器歩行レベルで転院された。

【考察】脆弱性と考えられた両側大腿骨頸部骨折に対し両側人工骨頭挿入術を施行し良好な結果を得た。

4. 人工膝関節置換術後に生じた大腿骨頸部骨折の2例

串間市民病院 整形外科

○川添 浩史 福嶋秀一郎

高齢者では明かな外傷の無い大腿骨頸部骨折が時に経験される。今回われわれは人工膝関節置換術後に外傷の契機のない大腿骨頸部骨折の2例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

【症例1】 86歳女性 右TKA 施行1年8ヵ月後、転倒などの外傷の契機無く右股関節痛を自覚。MRIにより大腿骨頸部骨折が判明。ハンソンピンによる骨接合術を行った。

【症例2】 73歳女性 右TKA施行3ヵ月後、左TKA施行。左の術後半年で特に誘引無く右出部痛を自覚。レントゲンですでに大きく転位した大腿骨頸部骨折が見られ、人工骨頭置換術を行った。

TKA術後の股関節痛の訴えは骨折の可能性を念頭において診療に当たることが重要である。

5. 転子部骨折術後にラグスクリューの骨内移動を生じた2例

高千穂町国民健康保険病院 整形外科 ○塩月 康弘 勝嶋 葉子

【はじめに】 転子部骨折術後にラグスクリューの骨内移動を生じた2例を経験したので、報告する。

【症例1】 82歳男性、平成18年12月転倒し転子部骨折（Evans分類 type 1 group 3）を受傷、short femoral nailを用いて内固定を行った。術後6週でラグスクリューの股関節内へのpenetrationを認めた。

【症例2】 96歳女性、平成19年11月転倒し転子部骨折（Evans分類 type 1 group 1）を受傷、short femoral nailを用いて内固定を行った。術後1か月でラグスクリューのback outを認めた。

【考察】 不安定型だけでなく安定型とされる骨折でも、思いもよらない合併症を生じる場合がある。

【まとめ】 転子部骨折では、側面像での整復位の獲得とその保持がより重要である。

6. 大腿骨近位部骨折術後歩行能の獲得時期と転帰先の検討

球磨郡公立多良木病院 整形外科 ○浪平 辰州 上通 一師 福田 一

【はじめに】 当科は周囲に術後患者の受け入れ可能な病院、施設がほとんど無く、リハの自己完結形式を取らざるを得ない状況である。今回、大腿骨近位部骨折患者の術後歩行能と転帰先について検討したので報告する。

【対象】 2004年4月～2006年9月までに当院で大腿骨近位部骨折骨手術を施行した127例（平均84.5歳）。男性23例、女性104例。頸部骨折40例、転子部骨折87例。

【方法】 自宅退院可能だったA、自宅から入院で、施設又は病院へ転院したB、施設から入院したC群の3群に分類し、年齢、在院日数、受傷前及び退院時歩行能力、術後2週毎の歩行能力等を比較検討した。歩行能力をFIMで評価した。

【結果】 歩行能力の経時的観察で2週、4週のA群とB、C群間に有意差を認めた。合併症は、B、C群で認知症の割合が高かった。在宅復帰率は77.1%であった。

【考察】 受傷後2及び4週でのFIMの歩行能力は、転帰先を決定する因子であることを示した。認知症合併患者では排泄、移乗動作の介助量軽減の有無が自宅復帰を左右していた。

一般演題Ⅱ（15：25～16：05）

座長 串間市民病院整形外科 川添 浩史

7. 当院における関節リウマチに対する生物学的製剤の使用状況とその成績について

潤和会記念病院 整形外科リウマチ科 ○甲斐 睦章 牧野 晋哉 由浅 充崇
西嶋 達也

【目的】当院RA患者に対する生物学的製剤（IFX、ETN）の使用状況と治療成績について検討を行った。

【対象・方法】対象はIFX、ETN投与を半年以上行ったRA患者32例（男性4例／女性28例）、平均年齢58.2歳、平均罹病期間10.8年、評価にはDAS28-CRPを用い、就業や家事労働状況等について調査した。

【成績】IFX投与例29例、ETN投与例8例（IFXより変更5例含む）であった。DAS28-CRPは投与前平均4.7より最終時平均3.3と改善を認めた。有職者は治療開始時11名であった。この内6名は休職していたが、治療開始後は全例復職した。主婦は家事労働ができるようになり、一部の患者ではスポーツ活動が可能になる等質の高い生活レベルを獲得していた。

【結論】生物学的製剤による治療にてDAS28-CRPなどのRA炎症の沈静化のみならず、質の高い生活レベルを獲得することが可能となっていた。

8. 悪性腫瘍切除後の皮膚軟部組織欠損に対する広背筋皮弁再建の有用性

宮崎社会保険病院 形成外科 ○樫山 和也 大安 剛裕 吉牟田浩一郎
橋口 叔子

広背筋皮弁は有茎および遊離皮弁として外傷性軟部組織損傷、難治性潰瘍、骨髄炎、腫瘍切除後の再建など広く利用されている皮弁である。本皮弁はその被覆範囲の大きさおよび採取後の機能障害は少なさから様々な部位に対して非常に利便性が高い。また血行がよく、栄養血管である胸背動脈および静脈は太く長く採取することが可能で、かつ解剖学的変異も少ないため比較的手技の容易な皮弁として知られている。

今回われわれは悪性腫瘍切除後の皮膚軟部組織欠損に対して、有茎または遊離による広背筋皮弁による再建を通して、その有用性について検討したため報告する。

9. 考案した緩衝体を土踏まずに試用した経験

平部整形外科医院
宮崎大学工学部機械システム工学科

○平部 久彬
池田 清彦

【目的】考案した緩衝体を土踏まずに試用し高校生アスリートの運動後の下肢に対する効果を調べること。

【対象と方法】男性5例（年齢17歳、1例、16歳、4例：8種競技1例、棒高跳び3例、三段跳び1例）に緩衝体を合成繊維で包んだもの（縦約9cm、横約7cm、高さ約3cm、重さ約11g）を試用した。土踏まずの下方に置き立位で間歇的に荷重させた。期間は平均約33日間。試用回数は1日平均2.8回。

【結果】全体としての評価としてはとても良い1例、良い1例、普通2例、やや悪い1例であった。下肢の症状は4例で改善された。緩衝体の二重ナイロンの外側ナイロンの損傷が1個に生じた可能性があった。

【考察】この緩衝体を使用しカラードップラー超音波血流装置を用い大腿静脈血流をボランティア2例で測定したところ増加していたので、高校生アスリートの運動後の下肢に対する効果を調べた。サイズ、荷重時間などについて今後検討したい。

10. 当院における術後深部静脈血栓症の予防

橘病院 整形外科¹⁾ 検査科²⁾

○吉川 教恵¹⁾ 柏木 輝行¹⁾ 吉田 尚紀¹⁾
山田美都子²⁾ 矢野 良英¹⁾

【はじめに】当院では、深部静脈血栓症（DVT）のリスクが高いと言われるTKA、THA、人工骨頭置換術に対し、さまざまな予防法に加え下肢静脈超音波検査（US）を施行している。下肢手術におけるDVT発生数、DVT予防法の検討を行った。

【対象と方法】2007年7月～2008年5月までに施行した下肢手術症例245例（TKA161例、THA57例、人工骨頭置換術27例）、平均年齢74歳（49～95歳）。これに対し、術後2～3日後にUS施行した。検討項目は、1）下肢静脈における血栓、血流うっ滞の有無、2）呼吸変動、下腿圧迫、足関節自動運動、足関節CPM、AVインパルスによる血流変動、3）ヘパリン、フォンダパリヌクスの有効性、4）血栓、血流うっ滞の存在した症例に対するリハビリの効果判定である。

【結果】血栓は12例（5%）、血流うっ滞は55例（22%）に認められた。USで最も血流改善が認められたのは足関節自動運動で、ついでAVインパルスであった。5週後の再検査では、90%の症例で血栓、うっ滞の消失が認められ、改善が認められなかったのは1例のみであった。

【まとめ】DVT予防には、AVインパルスやXa阻害剤の効果の報告も多いが、足関節自動運動が最も重要である。

1 1. 舟状骨骨折に対する治療経験

宮崎社会保険病院 整形外科

○小牧 亘 松元 征徳 本部 浩一
益山 松三

2006年12月から2007年12月まで当科にて手術した新鮮舟状骨骨折について、若干の文献的考察を加え報告する。症例は舟状骨骨折6例であり、男性5例、女性1例であった。手術時平均年齢は27歳であった。手術は透視下で施行した。主にメイラ社製DTJ screw を使用した。転位が認められないあるいはわずかな転位例には経皮的に、認められる例には観血的にスクリュー固定した。短期間の経過追跡ではあるが、いずれも良好な治療成績が得られた。舟状骨骨折に対する内固定の利点としては、外固定期間の短縮、骨癒合期間の短縮、また早期の手関節運動が可能となり、日常生活の制限が少ないと考える。

☆☆☆ 休憩 (10分) ☆☆☆

主題：(16:15～17:20) 橈骨遠位部骨折

座長 宮崎大学医学部整形外科 矢野 浩明

12. 橈骨遠位端骨折に対するModified Kapandji pinning法の経験

整形外科前原病院

○下野 哲朗 富永 博之 和田 正一
吉永 一春 前原 東洋

【目的】橈骨遠位端骨折の治療の目的はできるだけ低侵襲で解剖学的整復を得ることである。最近我々は、西尾の報告したModified Kapandji pinning法に準じた手術を行い良好な成績を得ているので、報告する。

【対象及び方法】Modified Kapandji pinning法を行った、40～83歳、男性2例、女性6例を対象とした。受傷時、術直後、最終観察時の単純X線所見(radial length=RL, radial inclination=RI, volar tilt=VT)、合併症の有無について評価した。

【結果】RLは受傷時平均-2.6mm、術後平均0.0mm、最終観察時平均-0.9mmであった。RLはそれぞれ18.7°、26.6°、26.6°であった。VTはそれぞれ-20.2°、11.3°、11.3°であった。明らかな術後合併症を認めなかった。

【まとめ】Modified Kapandji pinning法は低侵襲で、優れた整復保持能力が得られる手術法である。

13. 粉碎関節内型の橈骨遠位部骨折に対する創外固定法の治療成績

宮崎県立日南病院 整形外科

○川野 彰裕 松岡 知己 三橋 龍馬
樋口 誠二

【目的】橈骨遠位部骨折のうち、整復位の保持に難渋する粉碎関節内型に対しBridge Type創外固定を行った症例の治療成績について報告する。

【対象・方法】対象は、28例29関節、男性15例16関節、女性13例13関節で、年齢は17歳～82歳、平均58.1歳、骨折型は斎藤の分類で粉碎Colles骨折20関節、粉碎Smith骨折4関節、背側Barton・chauffeur合併骨折3関節、掌側Barton・chauffeur骨折2関節であった。骨移植を4例、Pinningを19関節に併用した。創外固定装着期間は平均6.3週、経過観察期間は平均7.1ヶ月であった。治療成績の評価にはX線計測および斎藤の評価基準を用いた。

【結果】全例、骨癒合は得られおおむね良好な成績であったが、合併症として橈骨神経浅枝の損傷：1関節、Screw刺入部感染：2関節、CRPS：1関節が生じた。

【考察】創外固定法の利点・欠点にあわせ、Plate固定の適応拡大についても検討した。

1 4. 橈骨遠位端骨折に対するACU-LOC Distal Radius Plate Systemの 使用経験

宮崎市郡医師会病院 整形外科

○森 治樹 福元 洋一 増田 寛
小島 岳史

橈骨遠位端骨折は日常頻繁に遭遇する上肢の外傷の1つである。本骨折は高齢者に多く、骨粗鬆症が強い症例や関節面の粉碎骨折では治療に難渋することも多い。近年このような症例に対して、掌側ロッキングプレートを用いて良好な成績が得られたとの報告が散見される。当科でもDistal Radius Plateを使用してきたが、最近はよりanatomical designで関節近傍からスクリューを挿入でき、且つ、茎状突起にも2本のスクリューを刺入可能な掌側locking plateであるACU-LOC Distal Radius Plate System(以下ACU-LOC)による治療を経験したので、その有用性について報告する。

1 5. 橈骨遠位端骨折に施行した掌側ロッキングプレートが折損した1症例

県立宮崎病院 整形外科

○森 達哉 今村 隆太 齋田 義和
高妻 雅和 阿久根広宣

【はじめに】橈骨遠位端骨折に施行した掌側ロッキングプレートが折損した1症例を経験した。

【症例】76歳女性。自宅にて階段を踏み外し転倒した際に左手をついて受傷。左手関節・左股関節の痛みを訴え、同日当院救急搬送された。既往歴として高血圧、肝硬変あり。来院時X線で左橈骨遠位端骨折(背側Barton+Colles骨折、A0分類C2)、左大腿骨転子貫通骨折を認め、同日手術施行。橈骨遠位端骨折に対しては掌側ロッキングプレートにて、左大腿骨転子部骨折に対してはCHSで骨接合術を行った。術後1週で経過良好であったため近医転院。術後7週の初回再診時X線にて掌側ロッキングプレートの折損および背側転位を認めた。疼痛の訴えなく仮骨形成も認めていたため患者と相談の上で経過観察とした。その後骨癒合傾向を認めていたため術後13週で抜釘術を施行し、抜釘時の所見でも骨癒合は良好であった。

【考察】掌側ロッキングプレート折損の原因などに関して、若干の文献的考察を加えて報告する。

16. 当院における橈骨遠位端骨折に対する、掌側ロッキングプレートによる治療経験

県立延岡病院 整形外科

○河野 立 栗原 典近 村上 弘
甲斐 糸乃 比嘉 聖

H18年8月よりH20年4月までに、当院にて手術を行った橈骨遠位端骨折症例は、29例（経皮的鋼線刺入固定1例、創外固定術7例、掌側ロッキングプレート21例）であった。

掌側ロッキングプレートを用い、経過観察可能であった18例について検討した。プレートはStryker社製Matrix smart lock systemを16例、日本ユニテック社製Volar distal radius plating systemを2例に使用した。

レントゲン評価はVolar tilt、Radial inclination、Ulnar varianceについて、機能評価については斉藤の評価を用いた。

若干の文献的考察を加え、治療成績について検討し報告する。

17. 術後再転位により治療に難渋した小児の橈尺骨骨幹部遠位1/3骨折の治療経験

県立宮崎病院 整形外科

○高橋 祐介

小児の橈尺骨骨幹部遠位1/3骨折に対し初期治療として経皮的Pinning施行したが、再転位を生じプレートによる内固定を必要とした2例を経験した。一方は偽関節形成となり、再手術の際に人工骨移植を必要とした。これらの症例に対して、文献的な考察を加え報告する。

【症例】

症例①

11歳男児。自転車から転倒し受傷。左橈尺骨骨幹部遠位1/3骨折に対して経皮的Pinning施行。術後4週で転位を認め、抜釘・徒手整復施行後、ギプスによる巻き込みを行った。その後、ギプス内で再転位を生じたが経過観察とし、術後8週に骨癒合良好でシーネによる外固定とした。シーネ固定2週後に再び転倒受傷した為、Plateを使用した骨接合施行した。

症例②

8歳男児。転倒し受傷。左橈尺骨骨幹部遠位1/3骨折を認め、翌日経皮的Pinning施行。術後転位を認めORIF（橈骨のみ）施行。尺骨、橈骨共に仮骨形成を認め抜釘したが、偽関節となった。受傷5ヶ月後に左橈骨偽関節に対して骨接合＋人工骨移植施行した。

18. 橈骨遠位端骨折後に遠位橈尺関節障害を来した症例

宮崎大学医学部 整形外科

○崎濱 智美 矢野 浩明 山本恵太郎
石田 康行 河原 勝博 田島 卓也
梅崎 哲矢 帖佐 悦男

【はじめに】橈骨遠位端骨折は非常に多い外傷であるが、骨折治癒後の変形や関節症が問題になることがある。今回当科において橈骨遠位端骨折後に遠位等尺関節障害を来し手術を要した3症例を経験したので報告する。

【症例】症例1。66歳女性。平成13年2月右橈骨遠位端骨折受傷、保存療法施行。遠位橈尺関節症出現し、受傷6ヶ月で手術施行した。症例2。76歳女性。平成12年10月右橈骨遠位端骨折受傷、保存療法を施行された。遠位橈尺関節症出現し、術後10ヶ月手術施行した。症例3。44歳女性。平成11年転倒し左手関節痛自覚するも加療せず。平成16年に左手関節痛自覚し、当科受診。レントゲン上橈骨遠位端骨折治癒後の遠位橈尺関節症認め、手術施行した。

☆☆☆ 休憩 (10分) ☆☆☆

特別講演 (17:30～18:30)

座長 宮崎大学医学部整形外科 帖佐 悦男

『橈骨遠位端骨折の治療』

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院整形外科
教授 笹 益雄 先生

閉 会